

第123代議長
原 テツアキ氏(70)



「ナ社会を創っていかねば」と気負いなく抱負を語る。

議員の本領が問われるとき

旧北淡町出身。岳翁は国土庁長官などを務めた原健三郎氏で、20数年間、東京とともに暮らした。「常に故郷を思い、頼まれごとにはすぐに動く。多大な影響を受けた」と憧憬は色あせず。趣味はゴルフで、酒はたしなむ程度。家族の一員にはトイプードルのミニオン(仏語で「かわいいの意」)も。座右の銘は「隅を照らす」。

援も大切。議会と行政が両輪となって、より良いポストコロナ社会を創っていかねば」と気負いなく抱負を語る。

ウイズ・コロナの時代に、県議会の舵取りを担う。「小康状態が続くが、第二、第三波を前に医療・検査体制の強化が求められる」と備えの重要性を強調。「一次産業への手厚い支援も大切。議会と行政が両輪となつて、より良いポストコロナ社会を創っていかねば」と気負いなく抱負を語る。

さらに政府の対応には、「ロックダウンのような強い規制をかけず、感染者数や死者数を低く抑えたことは範として世界にアピールすべき」と評価した。大手の商社マンとして米国5年、上海に4年駐在し、高度経済成長下に国際舞台の第一線で活躍した。一方、構えず率直な

また、県財政について「疲弊した経済はすぐには元に戻らない。いまの行革は見直しが必要だ」と見解。「今後の地域経済はさまざまな想定が必要だが、各界各層の一人ひとりが努力を惜しまず、自分ができることを全うすれば立ち直りは早いはず」と展望し、新しい時代への曙光を見出した。

人柄に親近感があふれる。

コロナ時代の議員像について、「地域の状況や課題をしっかり把握し、県や国に対策を求めていく橋渡し役として、本領が問われている」と問題提起。「役割はこれまで以上に重要。張り合いがある」と意気込みを見せる。

県議会・新正副議長プロフィール